



Title	成瀬巳喜男と<不確かさ>の映画：1951年以降の作品を中心に [全文の要約]
Author(s)	黄, 也
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第14568号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/81440
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Ye_Huang_summary.pdf



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名：黄 也

学位論文題名

成瀬巳喜男と〈不確かさ〉の映画
——1951年以降の作品を中心に

・本論文の観点と方法

本論文は、黒澤明、溝口健二、小津安二郎に次ぐ「日本映画の第四の巨匠」、成瀬巳喜男についての考察である。成瀬に関する先行研究は、成瀬の没後から生誕100年の2005年に渡り、反映論から作家主義、テキスト分析（視線と空間構造、女優の身体性など）へと転換している。成瀬の作家性を再評価する過程のなかで、彼の映画史的な位置づけをより明確化しようとする一方、外在的な要因を捨象し、戦前と戦後の作品の連続性を強調している。そして、2005年以降の成瀬研究として、歴史学的な文献調査、文化社会学やポストコロニアリズムなどの多彩な方法論へと分岐している。各論者の方法論が新しい読解可能性を示しているにもかかわらず、成瀬フィルモグラフィにおいて特殊な位置づけを占める『浮雲』（1955）に分析が偏っている。このように、成瀬研究は、実はまだ十分に検討されているとは言い難い。

本論文は、1951年以降に、歴史的な背景や成瀬の演出法において起きた決定的な転換に着目し、その転換とともに具現化した、代表作の計9本の成瀬作品を〈不確かさ〉を捉えた映画として一括し、成瀬の他作品にも言及するアプローチを行なっている。本論文の言う〈不確かさ〉は、先行研究では主に論じられてきた結末の未完成、ストーリー上の起伏変化の欠如、ジャンル逸脱性にとどまらず、家庭内の関係の可変性、感情の多元性、金銭と性愛をめぐる交換の攪乱、照明設計での「軟調」、時間叙述の多様性、日本家屋のなかで／延長線上に並列される二つの空間とそこにいる身体の不確定性などへと拡がりを見せる。このように、本論文は、〈不確かさ〉という鍵概念から成瀬作品を多元的に捉え、全体を明らかにしようとする。

・本論文の内容

本論文では〈不確かさ〉を主題に、成瀬の1951年から1967年の遺作に至る9本の代表作の分析を中心とする三部構成を成している。これらの三部ほかに、序章と終章とを設けている。これにより、成瀬作品の全体を捉えようとする。

序章では、国内の映画研究者によって書かれた代表的な先行研究を通覧し、それまでの成瀬研究の方法論の変化を整理する。そのうえで、1951年という歴史的な転換を伴って、成瀬作品の内容と演出で起きた決定的な変化（全面的に子供のいない女性を主人公とする夫婦や男女の横の関係へと焦点が移ったことや、日本家屋のなかで／延長線上に二つの空間が並列されること）が、どのように〈不確かさ〉の特徴の形成に寄与しているのかを本論文の問題意識として提起した。

第一部（第1～3章）は、家庭内の関係の〈不確かさ〉の問題を扱う。第1章では、林芙美子原作の『めし』（1951）が分析対象となる。『めし』が成瀬作品において、転換を示すことを歴史的な考察から明らかにしたうえで、夫婦の倦怠生活を描いた「妻

もの」作品の典型として知られる本作では、夫に現れる姪、妻に現れる従兄と、それぞれ擬似的な近親相姦の雰囲気漂浮することで四人の関係が不安定化する特徴から、本作の同一化=交換のメカニズムを見出した。そして、原作者が小説執筆の途中で急逝したために、映画版独自の結末を、足の主題系から考察することで、さらに「壊れやすい和解」が示されていることを解明した。本論文はここに〈不確かさ〉の積極的価値を見出す一方、どのように当時のイデオロギーに抵抗したのかも明らかにした。

第2章では、岸田國士の戯曲をパッチワーク脚色した『驟雨』(1956)が考察される。東京郊外の新興住宅地を舞台とする本作の特異性を指摘したうえで、倦怠生活を送る並木夫婦の隣に今里夫婦が引っ越してきて、四人の間では形成した擬似的なスワッピング関係に注目する。具体的には、二つの家の境界領域で起きている四人の間では並置と交換の二重運動を分析し、本作におけるコメディ映画の手法と結びつけて論じた。最後に、夫婦が紙風船を打ち合うラストシーンで、夫婦の不安定な身振り、新興住宅地の三つの庭空間が縦構図で連続的に捉えることにより、宙吊りながら含みある〈不確かさ〉を持ったことを明らかにした。

第3章では、川端康成原作の『山の音』(1954)が分析される。成瀬が映画化する際に直面した性を描くことの「難しさ」というジレンマに着目し、本作における夫婦間で暗示の域にとどめられる性愛描写と、嫁と義父の間の擬似的な近親相姦という二つの性描写について論じた。具体的には、尾形家という日本家屋とその延長線上の中間領域の空間性、ヒロイン・原節子の身体性が、どのように結びつけられ、サスペンフルに演出されているのかを分析し、また、ラストにおいてその日本家屋が無化される際に現出する、関係性と身振りの変化を指摘した。

続く第二部(第4~6章)は、金銭をめぐる交換の〈不確かさ〉の問題を扱う。第4章では、知り合いに金貸しをもしている元芸者を主軸にする群像劇の『晚菊』(1954)について分析を行う。まず、登場人物たちのキャラクター造形と金銭の関連性を論じた。そして、金銭と視線と手がどのように連動してアクションが生起するのかを分析し、とりわけきんを演じる杉村春子が、元愛人を来訪する目的を察する前後で、相手に向かっていった手と視線、身体の方向性における一致とそのズレの微細な差異を、本作のフィルム・ノワールの感触と結びつけて明らかにした。

第5章では、花街・柳橋の芸者置屋を舞台にした幸田文原作の『流れる』(1956)が、文化復興と「売春防止法」の時代背景の要請に応じて作られた側面を指摘したうえで、作中の芸者置屋の空間性、男性表象、擬似的な家族性、山田五十鈴の身体性などの反時代的な特徴を明らかにした。そして、もう一人の主人公の梨花=お春に注目し、原作と脚本と映画の三者を比較したうえで、媒介者としての梨花=お春の宙吊りの選択と身振りによって、どのように当時のいずれのイデオロギーにも抵抗しているのかと論じた。

第6章では、成瀬作品における労働の主題を見出して分類する。そのなかで、水商売に従事する女性の身体性と労働空間はどのように変化していくのかを、『夜ごとの夢』(1933)、『銀座化粧』(1951)、『女が階段を上る時』(1960)を取り上げて比較したうえで、『女が階段を上る時』の特異性に注目した。具体的には、性交と金銭の交換(不)可能性と、公私領域における攪乱の特徴を明らかにした。作品のフィルム・ノワール調の分析とともに、この公私の要素を女優業そのものに本論文はなぞらえ、本作がメタ映画でもあると結論を導く。

第三部(第7~9章)は、感情と時間性の〈不確かさ〉の特徴を検討する。第7章は、成瀬作品で最も評価の高い『浮雲』を取り上げる。まず、『浮雲』が成瀬作品にお

いて、曖昧な位置づけを示す論拠となる主人公二人の移動の演出に注目し、それを本作の特殊な時間性と結びつけて論じた。具体的には、主人公二人の三つの移動、すなわち二人の出会いの場である日本軍占領下の仏印での歩行、戦後の東京とその周辺町での歩行、交通手段による屋久島への移動が、それぞれ異なる演出によって、〈不確かな〉時間性を作り出していることを明らかにした。

第8章は、映画産業の斜陽化とテレビの普及が交差する地点で、テレビドラマから翻案された特殊な歴史的な位置づけを示す『乱れる』(1964)を取り上げる。そして、二つの脚本の変更点に注目することで、映画『乱れる』がメロドラマ構造に自己言及しつつ、それに抗っている特徴を明らかにした。とりわけ結末場面にしばって、決定不可能な関係、「ただの死」、ヒロインの顔、疾走と静止のパラドックス、足の主題系といった多角度から分析することによって、本作がメロドラマであると論じる従来の言説を転覆させる要素を示した。

第9章は、遺作の『乱れ雲』(1967)が分析対象となる。まず、成瀬作品における交通事故の主題と、メロドラマをめぐる歴史的な考察を行なったうえで、『乱れ雲』では事故当事者と被害者家族のあいだに不可能を超えて相愛が成立しそうになるが、不可抗力の交通事故によってメロドラマ的な因果律があらかじめ超えられていたと指摘した。そして、主人公二人のあいだで生じている負債関係とその転倒、及び苦難=情念の特徴が、どのようにヒロイン・司葉子の感情が同定できなくなる身振りの変化をもたらしているのかを分析した。最後に、共通性が高いダグラス・サーク監督『心のともしび』(1954)と比較し、『乱れ雲』の映画史的な位置づけを示した。

終章は、これまで論じてきた論旨を再整理し、成瀬作品と同時代の他の作品との比較について語り残したことや、現在の日本映画のなかで潜む成瀬作品との関連性を指摘しつつ、本論文の全体をまとめる。